

ロータリーパーラ

学園だより

地方競馬益金事業
No. 10
1975年3月31日発行
財団法人
中国四国酪農大学校

卒業生の組織を

確立しよう

副校長 永井 仁

卒業生の皆さん、お元気ですか。“学園便り”をお届けする時期になりました。この便りも少くとも年二回は出したかったと思いませんか。今年もとうとう果せませんでした。この時期になりますとどうしても雪のことになります。今までの所(二月十日現在)例年より暖かく牧欄も半分以上埋ったことはありません。五〇年から初めました教育施設(研修センター女子寮体育館)の整備も一応終わりましたので、去る五月二十七日お世話になった皆さんにお集り載りてさ、やかに感謝の気持ちを表しました。今年の計画はロータリーパーラの建設でした。諸般の情勢から難しいのではないかと少々心配して居りましたが、関係皆さん特に岡山県と地方競馬全国協会の特別の御配慮により十一月末に第二牧場に完成、近代施設の威力に驚いたり喜んだりして居ります。これで当初計画の殆んどが達成出来ましたがそのうえ農林省および岡山県の御援助により来年は気密

サイロも出来ることになりました。その御厚情に対し心から感謝いたして居ります。

さてこのように各方面からの物心に亘る御援助により学校の施設は立派に整備出来ましたが、これにお応えするには我々と卒業生の皆さんが一番しっかりしなければなりません。その具体的な方法としては卒業生の組織を確立して、従横の繋りを密にし地域社会に奉仕することに外ならないと思います。併らこのことは皆さんの盛り上りに期待しなければ長続きはしないと考え積極的な働きかけは控えて居りましたが嬉しいことに、昨年九月十日島根県の卒業生会が太田市で開かれ、先輩後輩十五名の方が、一部には二世を伴って参集寝食を共にして語り合い有意義な日を過しました。その席で卒業生の結成が決議され、会長に二期生の土江氏、事務局長に四期生の住田氏を選び来年から出雲、石見の両地区で交互に開催することとなり来

年の世話人まで決まるといって程意気が上りました。

次いで十二月十七日十期生の諸君が現地蒜山に十名集って一夜を共にし、元気の良い所や同窓の良さを見せて呉れました。一年前に卒業したとは思えない程の成長ぶりには驚きました。

今年に入って一月十四日八期生の諸君が十九名旅館に参集しました。此の期は私が着任して初めて出した卒業生であつただけに感慨一入、五年前のあの幼な顔が逞しい社会人、経営者の顔に成長しているのを見て

卒業生の組織を確立しよう
永井 仁 1
牧場の現況
光畑 2
第一牧場
百野 4
第二牧場
五年間の足跡
日笠重雄 6
卒業生からの便り
10
大学校日記
12
お知らせ
13
人の動き
13
入学生名簿
14
卒業生名簿
14

卒業生の組織を確立しよう	1
永井 仁	1
牧場の現況	2
光畑	2
第一牧場	4
百野	4
第二牧場	4
五年間の足跡	6
日笠重雄	6
卒業生からの便り	10
大学校日記	12
お知らせ	13
人の動き	13
入学生名簿	14
卒業生名簿	14

“酪大に来て良かったなァー”と
しみじみ感じました。

このように五二年度は卒業生の集
りの盛り上りの芽が膨みました。五
三年はこの芽を大きく育て先輩後輩
相集って地域社会の為に有機的に役
立つ年にしようではありませんか。

最後に私事で恐縮ですが此の紙面
をお借りして皆さんにお礼を申し上
たいと思います。お蔭様で此の三月
末をもって退職することになりました
た。役人生活二十四年余の中で酪大
での五年間程充実した日々を送らせ
て載いたことはありません。ともす
れば脱線しかねない私を影になり日
向なつて御指導いたゞいた畜産局の
方々、関係県の皆さん特に物心両面
に亘つて支えていたゞいた岡山県御
当局、地方競馬全国協会の皆様には
お礼を申し上げる適当な言も見当り
ませんたゞ“有難うございました”
のみで御許し下さい。

また苦勞をかけ通しだつたにも抱
らず持てる力を十二分に發揮してい
ただいた職員の皆さんバックボーンで
あつた卒業生の皆さんに心から感謝
を申し上げます。本当に有難うござい
ました。本校および卒業生の皆さん
の限り無い御発展をお祈りしてお礼
の言に替えさせていただきます。

牧場の現況

第一牧場だより

今年は何年になく暖冬で、ここ蒜
山地方でも暖かい日が続いていまし
が、一月末よりシベリア上空の寒気
団が南下しこのところ連日のように
厳しい冷え込みが続き、立春を過ぎ
たとはいえ最低気温を記録していま
す。新聞紙上では日本列島に節分寒
波とか、立春寒気団の襲来というこ
とで報じられていますが、卒業生の
皆さんもさぞかし大変な日日であつ
たことと存じます。

さて、第一牧場の現況ですが、職
員は新進気鋭の柴田先生、学校創立
以来のベテラン常守先生、それに新
参者の光畑の三名と教務課の津高、
早瀬両先生の応援により第十二期生
第十三期研修生と共に大いに頑張っ
ています。

▲牛の状況
現在第一牧場では成牛二十八頭(搾
乳牛二十五頭、乾乳牛三頭)育成牛
十六頭それに肥育牛六頭の合計五十
頭を飼養しています。今年度は後継
牛が順調に育つたため更新が多く行

われ表一のように牛群全体が若返り
卒業生の皆さんが在学当時活躍して
いた個体番号六〇〇代の牛は大部分
が姿を消しました。しかしその娘牛
たちが現在では活躍しています。

▲自給飼料の生産状況
昭和五十二年は圃場作業にとつて
最も心配された台風の被害も少なく、
天候は概ね順調であつたため主な作
業は計画どおりに実施することがで
きました。特に本年度は自給飼料の
増産と圃場作業の省力管理のためブ
ロアカッター、ヘイメーカー、ヘイ
テッダー等の導入により作業の効率
が一段とよくなり、乾草サイレージ
等の品質も向上しました。自給飼料
の生産については常守先生の周到な
計画と一貫した作業体系による綿密
な肥培管理により当初の計画よりは
るかに多い収穫があり、生産量は飼
料畑、牧草地を平均して一〇a当り
約六、三〇〇kgで、特に秋作イタリ
アンライグラスの成長がよく通年イ
タリアンライグラスの生産量は一〇
a当り約七、一三〇kgにも達し青刈
飼料の少ない十一月、十二月に十分
利用でき、なお余剰なものについて
は第二牧場に二二・五tばかり刈取
給与してもらつたような次第です。

▲繁殖成績
生乳の生産と緊密な関係にあるの
が繁殖成績即ち分娩間隔ですが、い
くら能力のすばらしい乳牛でも分娩
間隔が長ければ高能力も無意味なも
のになってしまいます。表二のよう
に年次ごとに徐々に分娩間隔も短縮
され成績が向上しています。表二は
放牧余剰分(掃除刈)と茅部野の借
用地を利用して約一五t(二、六六

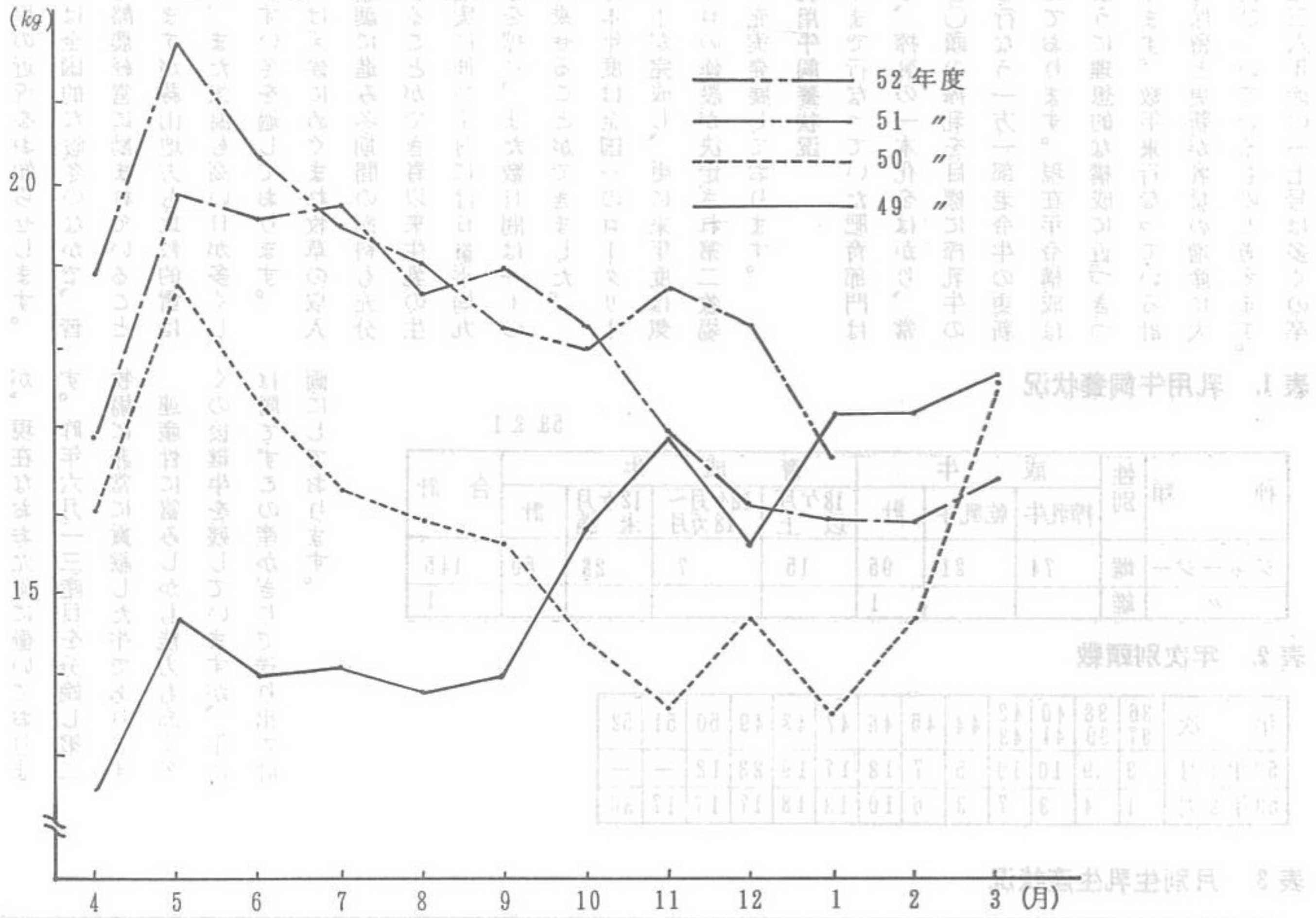
五梱包)確保しました。自給飼料の
総生産量は放牧利用分を加えて約九
六五tで利用率七八・六% (約七六
〇t)程度になっています。

以上第一牧場の近況をお知らせし
ましたが、今後更に牧場の発展と充
たす所存でございますので皆さん方
のご来場をお待ちしております。
最後に卒業生の皆さんのご健康と
一層のご活躍をお祈りいたします。
(第一牧場光畑記)



放 牧

図1. 月別1日1頭平均搾乳量の推移(49~52)



年度別・牧場収入と肥飼料代

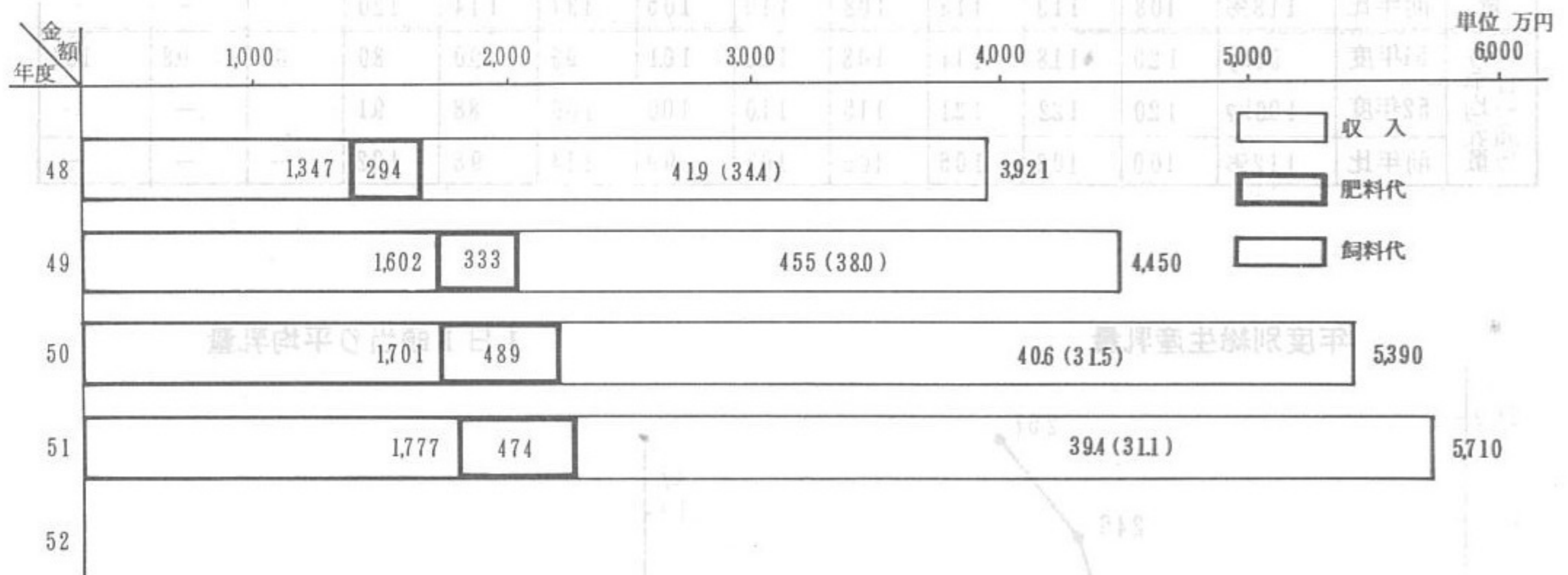


表1. ホルスタインの年令別構成

(53.2.5現在)

出生年次	52	51	50	49	48	47	46	45	計
頭数	6	9	7	6	8	5	1	2	44
比率	13.6	20.5	15.9	13.6	18.2	11.4	2.3	4.5	100

表2. 分娩間隔の推移

(48.4~53.2)

年度	48	49	50	51	52
平均月数	15.3	14.7	14.3	14.0	13.3

第二牧場だより

卒業生の皆様にとって思い出多い第二牧場の近況をお知らせします。今年全国的な暖冬のなかで、皆様方も酪農経営に励まれていることと思ひますが、現在なおお元気に働いております。昨年六月一三産目を分娩し第二牧場に非常に貢献した牛であります。連産性に富みしかも能力も高く多くの後継牛を残していますが、年には勝てずこの産かぎりですり出す計画にしております。

本年は天候にめぐまれ牧草の取入れも順調に進み冬期間の飼料も充分確保することができ春以来生乳の生産は確実に伸び7月には日量平均九六〇kgを搾り、また数日間は一トンの大台に乗せることができました。一方本年度は全国一のロータリーパーラーが完成し、更に来年度は気密サイロの建設が決定され第二牧場は益々充実発展しております。

一、乳用牛飼養状況

昨年まで行なっていた肥育部門は廃止し、搾乳の一本化をはかり、常事一〇〇頭の搾乳を目標に搾乳牛の増頭を行なう一方一部老令牛の更新を進めております。現在年令構成は表のように理想的な構成に近づきつつあります。数年来行なっている計画的な保留と更新が乳量の増産に大きく結びついているものと考えます。昭和三六年産の一七号は多くの卒業生の方々が御存知の事と思ひますが、現在なおお元気に働いております。昨年六月一三産目を分娩し第二牧場に非常に貢献した牛であります。連産性に富みしかも能力も高く多くの後継牛を残していますが、年には勝てずこの産かぎりですり出す計画にしております。

表 1. 乳用牛飼養状況

53. 2. 1

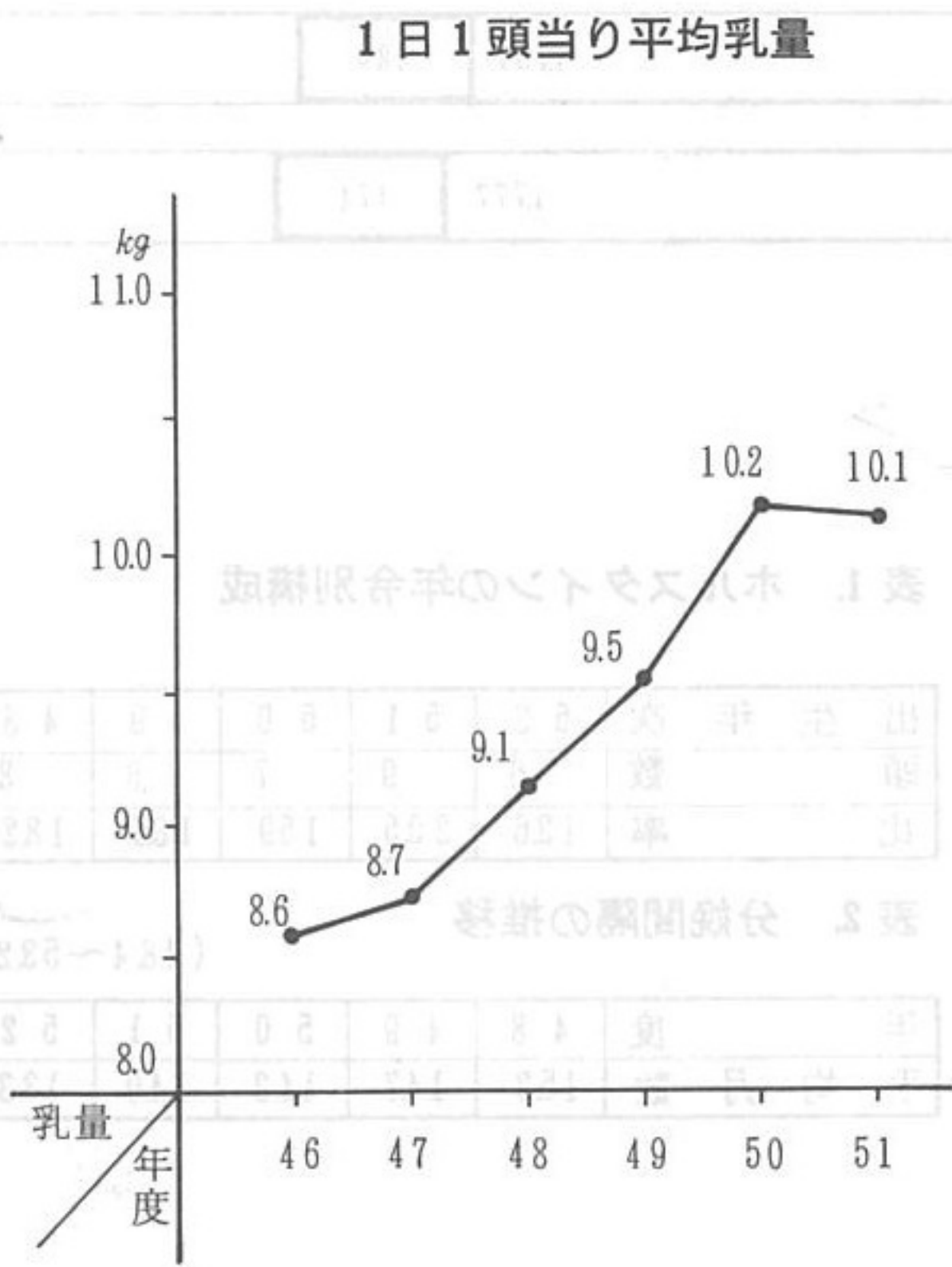
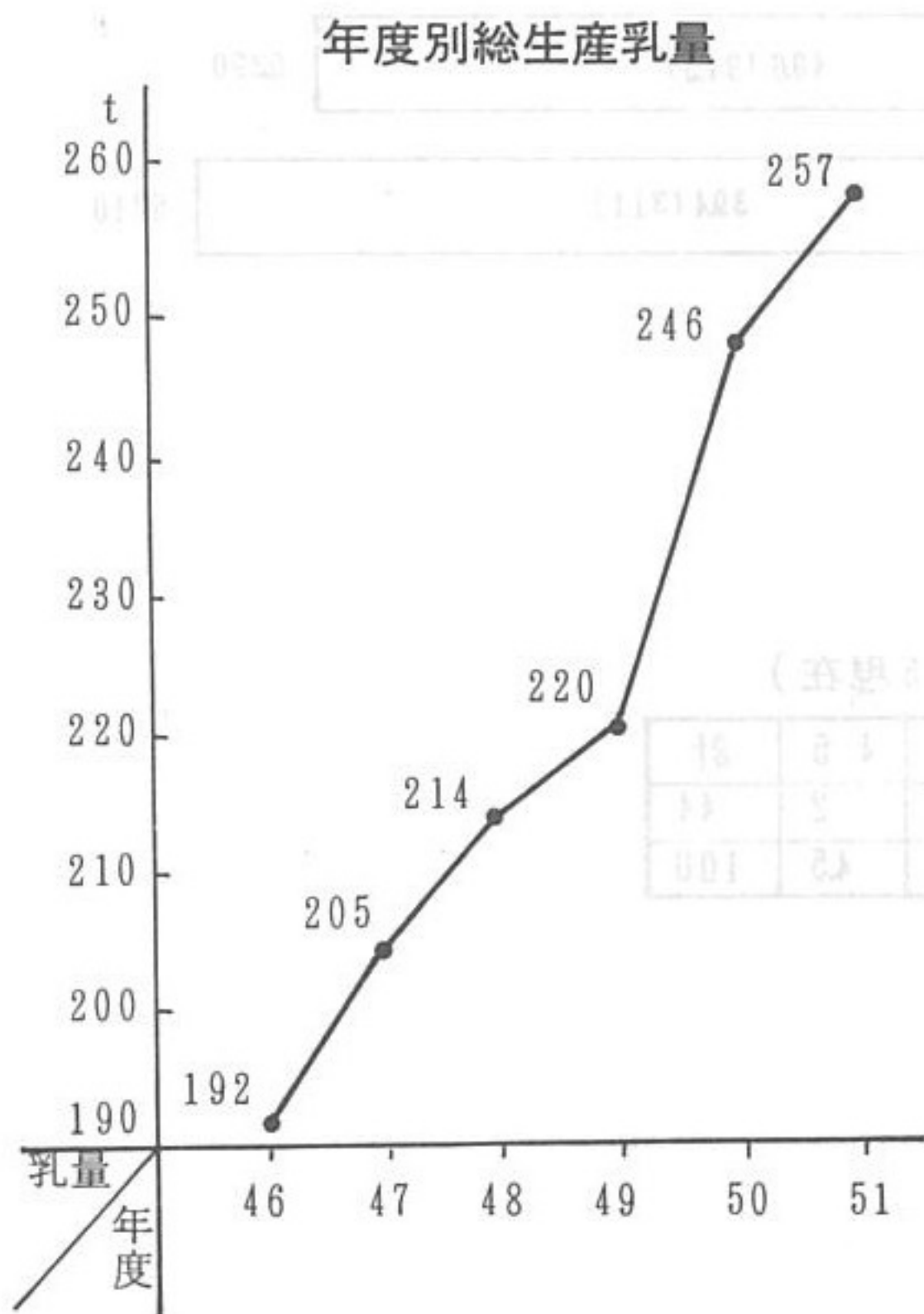
種類	性別	成 牛			育 成 牛				合 計
		搾乳牛	乾乳牛	計	18ヶ月以上	12ヶ月～18ヶ月	12ヶ月未満	計	
ジャージー	雌	74	21	95	15	7	28	50	145
"	雄			1					1

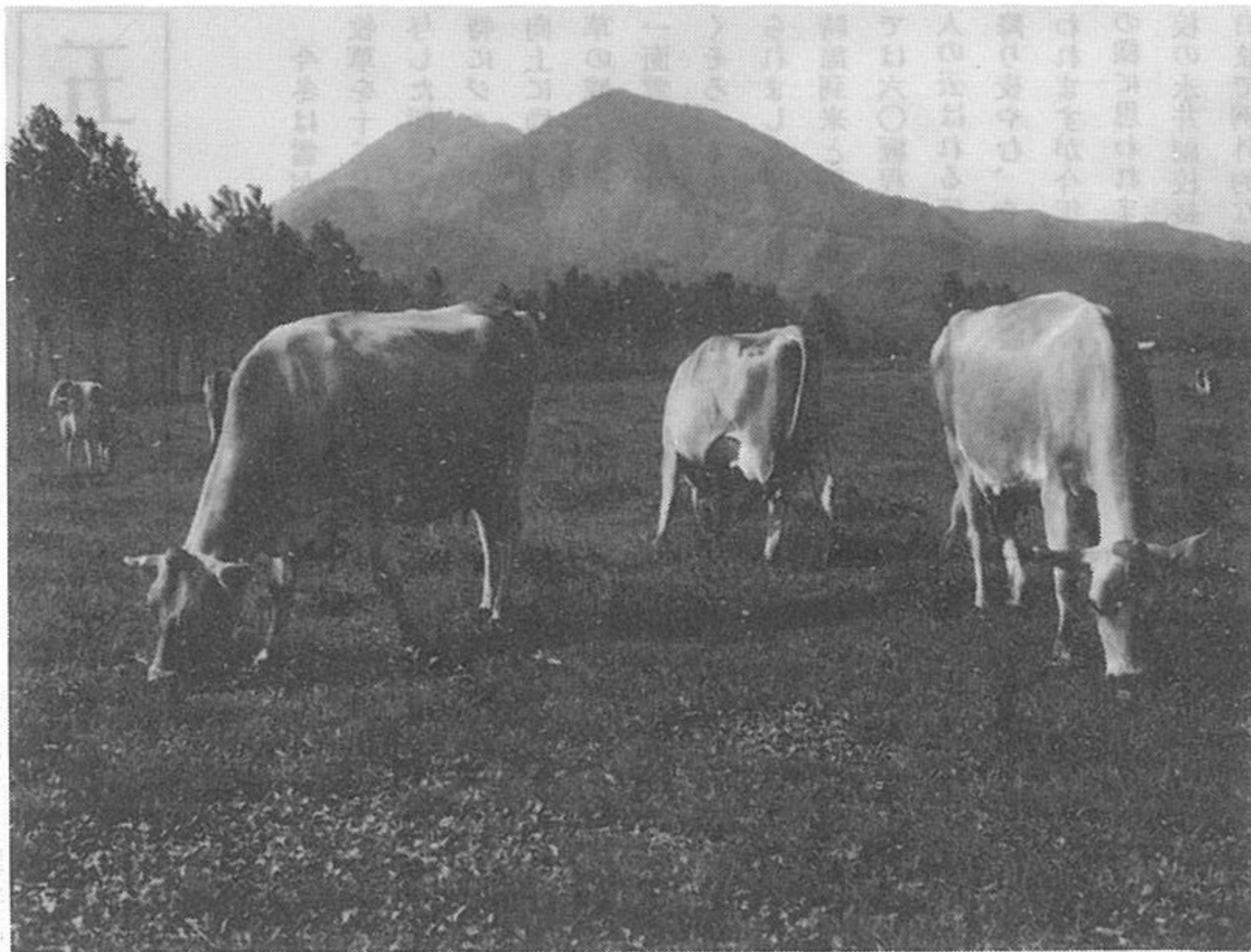
表 2. 年次別頭数

年 次	36 37	38 39	40 41	42 43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
50年4月	3	9	10	10	5	7	18	17	19	23	18	—	—
53年2月	1	4	3	7	3	6	10	13	18	17	17	17	30

表 3. 月別生乳生産状況

区 分		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合 計
総乳量	51年度	18,540kg	25,144	24,766	26,163	24,813	22,062	22,873	19,405	19,051	18,298	16,466	19,222	256,803
	52年度	21,945kg	27,242	27,993	29,684	26,819	24,371	23,923	26,491	21,786	21,894	—	—	—
	前年比	118%	108	113	113	108	110	105	137	114	120	—	—	—
一り平均頭当量	51年度	9.5kg	12.0	11.8	11.4	10.8	10.2	10.1	9.3	9.0	8.9	9.3	9.8	10.1
	52年度	10.6kg	12.0	12.2	12.1	11.5	11.0	10.0	10.6	8.8	9.1	—	—	—
	前年比	112%	100	103	106	106	108	99	114	98	102	—	—	—





ジャージー放牧

二、生乳生産状況

本年度も生乳の生産は表に示すように順調な伸びを示しています。特に一月の伸びは大きく、これは天候にめぐまれ非常に暖かい秋となり草の伸びが良かったことと、第一牧場のイタリアンの青刈りを第二牧場に上げたことが大きな要因であり、

あらためて草の力を知らされた秋となりました。また、冬期に入っても比較的順調に伸びております。これは充分な粗飼料の確保ができたことと、暖冬のおかげです。一二月の搾乳開始による乳量の低下であり

三、粗飼料の生産

本年も昨年に続きトウモロコシを約5ha作付しました。トウモロコシ作りは、粗飼料の確保が最も大きな目標であります。冬期間の堆肥の処理対策と草地更新の前作として良い結果を生んでいます。三ヶ原特有のものかも知れませんが、たでの繁茂には手をやくしまつです。立派なトウモロコシを作ることができたのは学生諸君の努力のおかげであります。また、暖かい秋のおかげでサイレージ、乾草の給与をおさえることができました。秋にはトウモロコシの後地を含め一二haの草地更新を行ない来年の粗飼料生産に備えています。

四、施設整備

本年は岡山県と地全協の補助を受け全国一のロータリーパーラが建設され第二牧場は大きく姿を変え皆様のおこしをお待ちしています。

ロータリーパーラは、五、〇〇〇万円を投じ牛乳処理室、機械室、待期場及び牛舎との連絡通路を含め五五〇㎡の施設を牛舎東側の乾草庫及び移動牛舎の跡地に建設しました。

昨年の一二月五日から運転を始めましたが、当初乳量の低下は大きく一〇〇kg程度の減少が数日続き、牛は追込むのではなく数人でかつぎ込むありさまでした。しかし日に日に牛はなれ旧パーラより搾乳時間は半分の一時間程度に短縮され、しかも省力的で一層衛生的な搾乳ができるようになりました。

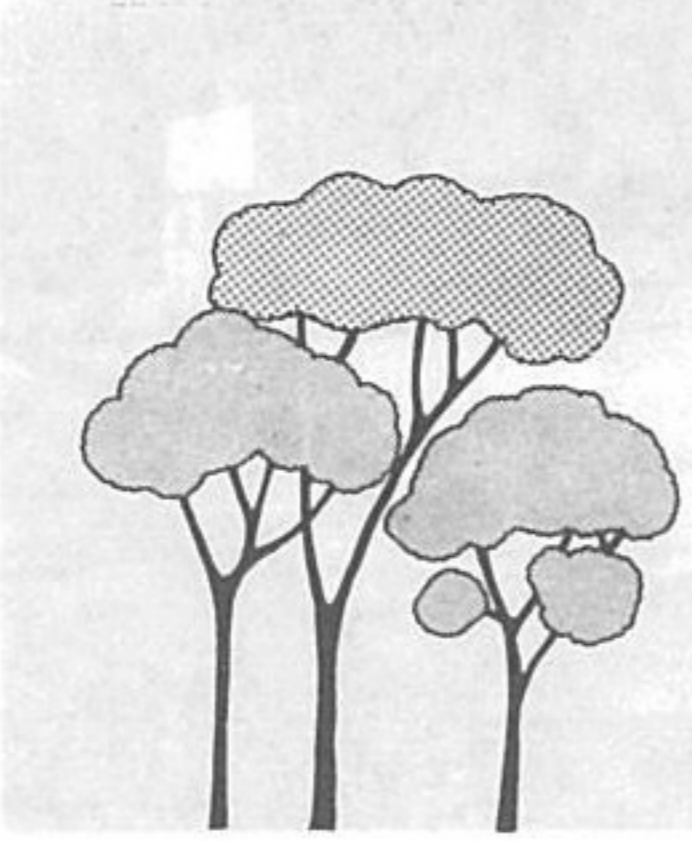
また一方ピックアップワゴンの導入は、草の収納作業のスピード化がはかられたことと、冬期間の粗飼料を充分確保できたことの一因でしょう。

来年度は気密サイロ及びトラクタを初め一連の作業機の購入が決定され益々第二牧場は近代化されつつあります。

我々職員はこの新しい施設をフルに活用し卒業生諸君にまけない酪農自営者を送りだすことはもとより生乳の増産に努力しております。

最後に皆様方の御健康を祈りつつ第二牧場の近況報告とします。

第二牧場百野記



乾草収納

五年間の足跡

教育部長 日笠重雄

今冬は雪が少い年と思つて喜んで

牧草を十二月の始めまで刈取つて給

与した関係で牛の方がビックリして

特にジャージーは草による泌乳能力

向上に励んでくれたので今更ながら

草の威力に感心して居る次第ですが

一面雪の降るまでに牧草を如何に短

くそろえるかと刈取の面で苦労させ

られました。やはり二月ともなれば

時節到来と例年通り降り続いて現在

では六〇糎程度の積雪で蒜山地方の

人の云はれるに暦の上での寒中は昼

降り夜やむ、そして気温が下ると云

われませんが今年は夜も降り例外の年

の様に思われます。例外と云えば本

校の永井副校長も昭和四八年より今

日まで例外的な頭脳と体力の持主で

学校運営に専念され三月で退職され

る予定ですがその間長年の念願であ

りました学校施設を整備されました。

これは永井副校長だけでは出来るも

のではありません卒業生の皆さんも

あらゆる地域で自営者として立派に

成人されているおかげで農林省地全

協を始め種々の関係機関の絶大なる

と一から五牧区まで糞尿、飲料水

パイプを地下に定置配管し適当な

位置に水槽と糞尿散布に必要な立

上り口を設置し全草地に糞尿散布

が可能な状態とすると同時に給水

施設があるためどの牧区でも昼夜

放牧も可能な状態に整備しました。

b スラリストアー設置 (三〇〇tハ

ワード)

草地に糞尿散布するためこれに貯

留攪拌して定置配管に送水するの

にトラクターのPTOを利用して

約三日間の散布で完了します。

c 草地造成 一ha

第一牧場四牧区(事務所裏側の雑

木林周辺)の草地造成

d 農牧道整備 三五六m

第一牧場の校門の処より二から三

牧区の民有地との境界に牧道を新

設

e バキュームカー 二tスター購入

昭和五〇年度

一、研修センター建設

鉄筋コンクリート二階建 一一

一三・九六²m

一階 研修室一四九²m 食堂一

四九²m

二階 学生寮 二三室 収容人

員四六名

一部屋 一五・三²m 二

名用(ベット)

二、女子寮建設

鉄筋コンクリート平屋建 一六

〇²m

二人用部屋四室 一部屋一八²m

和室 一二畳

収容人員 八名

三、飼料基盤整備事業

a 草地造成 四・一ha

第二牧場五、六牧区周辺の自然草

地を造成

b 農牧道整備 一〇八〇・二m

第二牧場第一牛舎の堆肥場から農

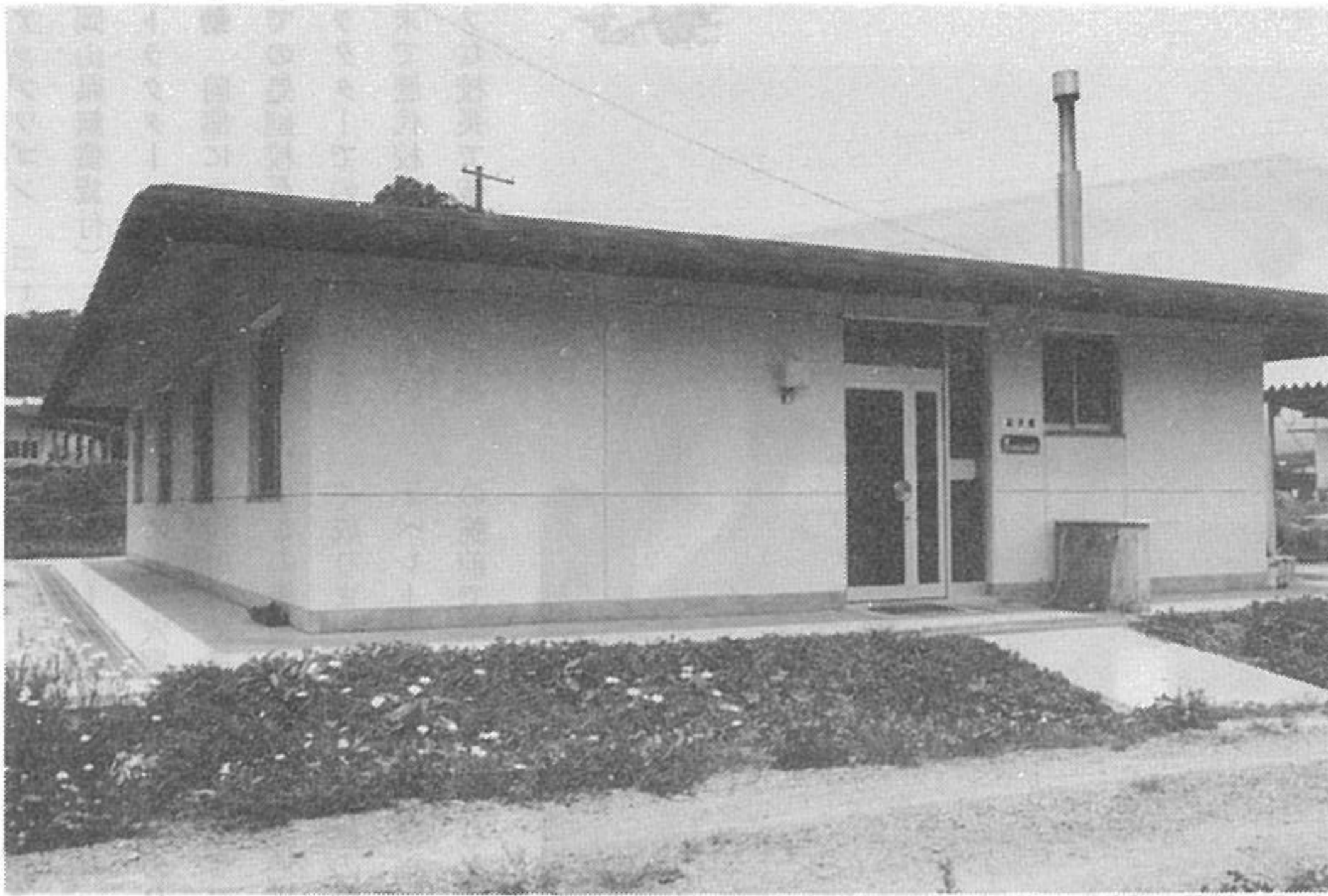
機具庫の横を通り、三木が原寮の

前を掘削してポプラ並木の地道を

キャンプ場の入口まで舗装道路に



第一学生研修センター



女 子 寮

これによってベレーラーが二台に整備されましたので、第一第二で同時乾草調整しても機械の取り合をする事がなく昔のことを思えば気が抜けた様な感じでチョッピリ寂しさをおぼえます。

昭和五十一年度
一、体育館新設 五二五²m

f 機械購入

二七六型ハイベラー(ニューホランド) 岡山県無償貸付
サイドレーキ(四輪) スター

第一牛舎側のスラリータンクに送尿しそこから散布するシステムに成って居ます。

整備

c 区画整地 二・二ha
第二牧場一七牧区は傾斜度が著しく、トラクターによる作業が危険でありましたので傾斜度を約七・九度に整理し機械作業の能率の向上を図った。

a 牧柵施設

第一牧場 八、九牧区周辺
第二牧場 五、九牧区周辺
七四五〇・七m

鉄製M柱 四線張り
この事業により木製の牧柵を一掃することが出来ました。

e 雑用水施設 四二四六m

第一牧場 七、八、九牧区 定置配管
第一牧場の運動場内に貯尿槽、九〇t新設し以前の貯尿槽とをパイプで連結し第一牧場内の既存の六ヶ所の貯尿槽に送尿貯留しそこからも散布可能にしたため全草地へ糞尿還元が出来る様になりました。



第二学生研修センター

旧講堂跡に鉄骨造一部鉄筋コンクリート平屋建一部二階建
旧講堂はそのまま南寮跡に農機具庫として利用しています。

二、第二研修センター
鉄骨造平屋建 一六〇²m

第二牧場の事務所と一部宿泊施設に利用しています。外観はなかなかユニークな建物で観光客がコーヒーショップと間違えて来られる様な景観です。

三、機械購入

a ピックアップワゴン 三t積 スター (岡山県無償貸付)

b MF185トラクター

前輪駆動 前部にローダー装着

現在までの処副校長の専用車様で

此のトラクターでの作業は全部さ

れる始末で歴代校長には例が無い

様なタフな校長で皆さん方は校長

のオモチャと呼んで居ります。仲

々仕事を良くする機械です。

c マッココーネルパワーアーム

俗に云う穴掘機でMF185のPTO

を利用して排水溝、穴掘等の作業

でこの機械のおかげで混地帯は無

く成りました。この機械の最優秀

オペレーターは自称副校長で仲々

の腕前で学校を辞任されたら土建

業のウンボのオペレーターで生計

が立てられる程の技術です。

d マイクロバス 三菱 二九人乗

e コバシローター KA二〇〇型

耕転巾二三〇cm

f サイドドレーキ 四輪 スター

g マニユアスプレッター二台 スタ

昭和五二年度

一、ロータリーパーラー新設

一二ポイント 総面積四六二m²

第二牧場の三木が原寮の下側に

八角形の建物で搾乳状況が外か

ら見学出来るように総ガラス張

で見学廊下も建造して居ます

から一般観光客にも広く開放の

予定です。

外観ばかりでなく搾乳時間も非

常に短縮出来省力化に非常に効

果があります。

以上で五ヶ年間に整備した大体の

施設機械を紹介いたしました。こ

れで終りではなく来年度も気密サイ

ロ機械等を新設整備する予定にし

て居ますので卒業生の皆様も一度御来

校になり生れ変わりつゝある学校の姿

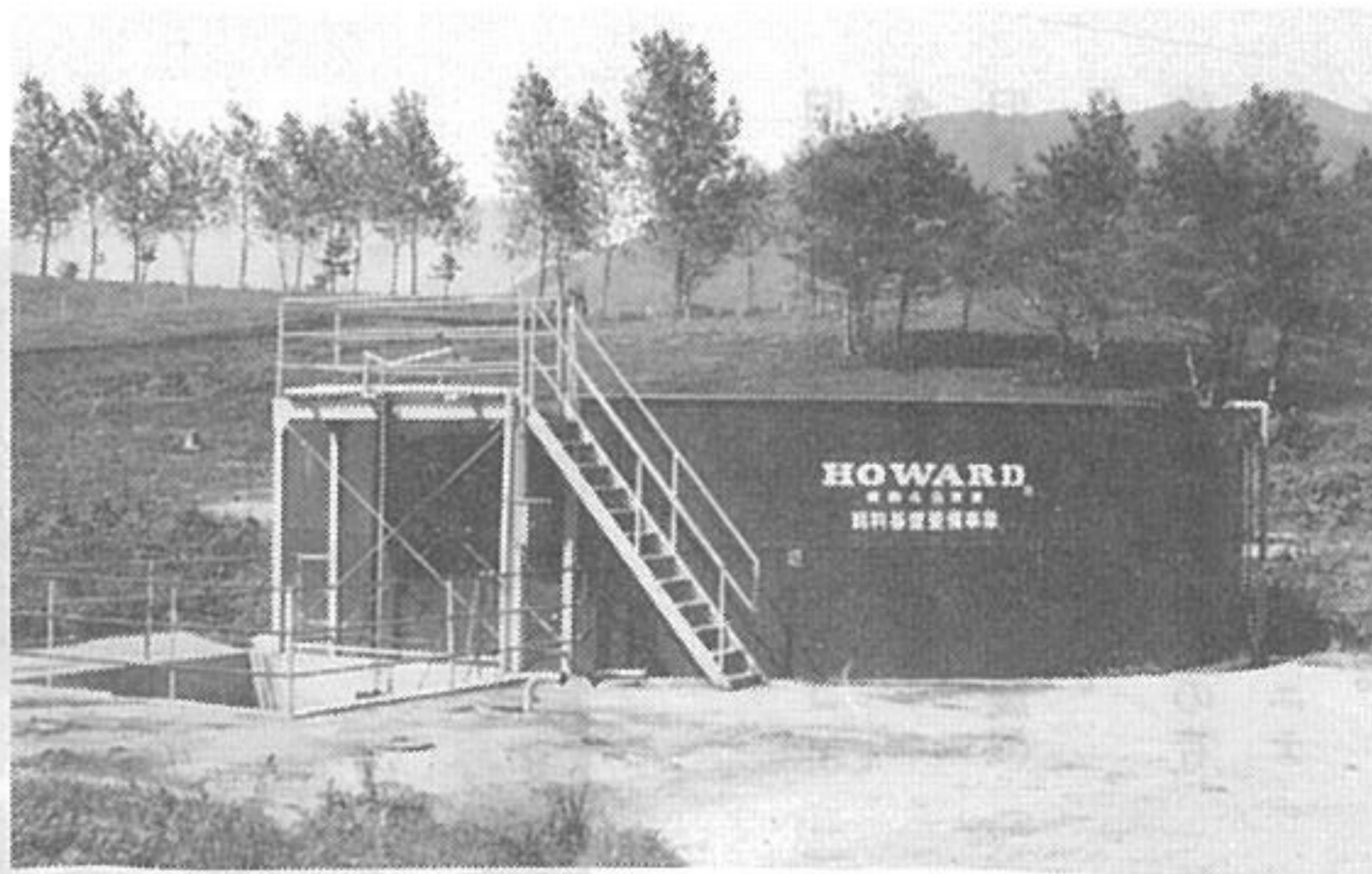
を見て載き皆様の貴重な体験談をお

聴かせ願えれば幸甚と思つて居る次

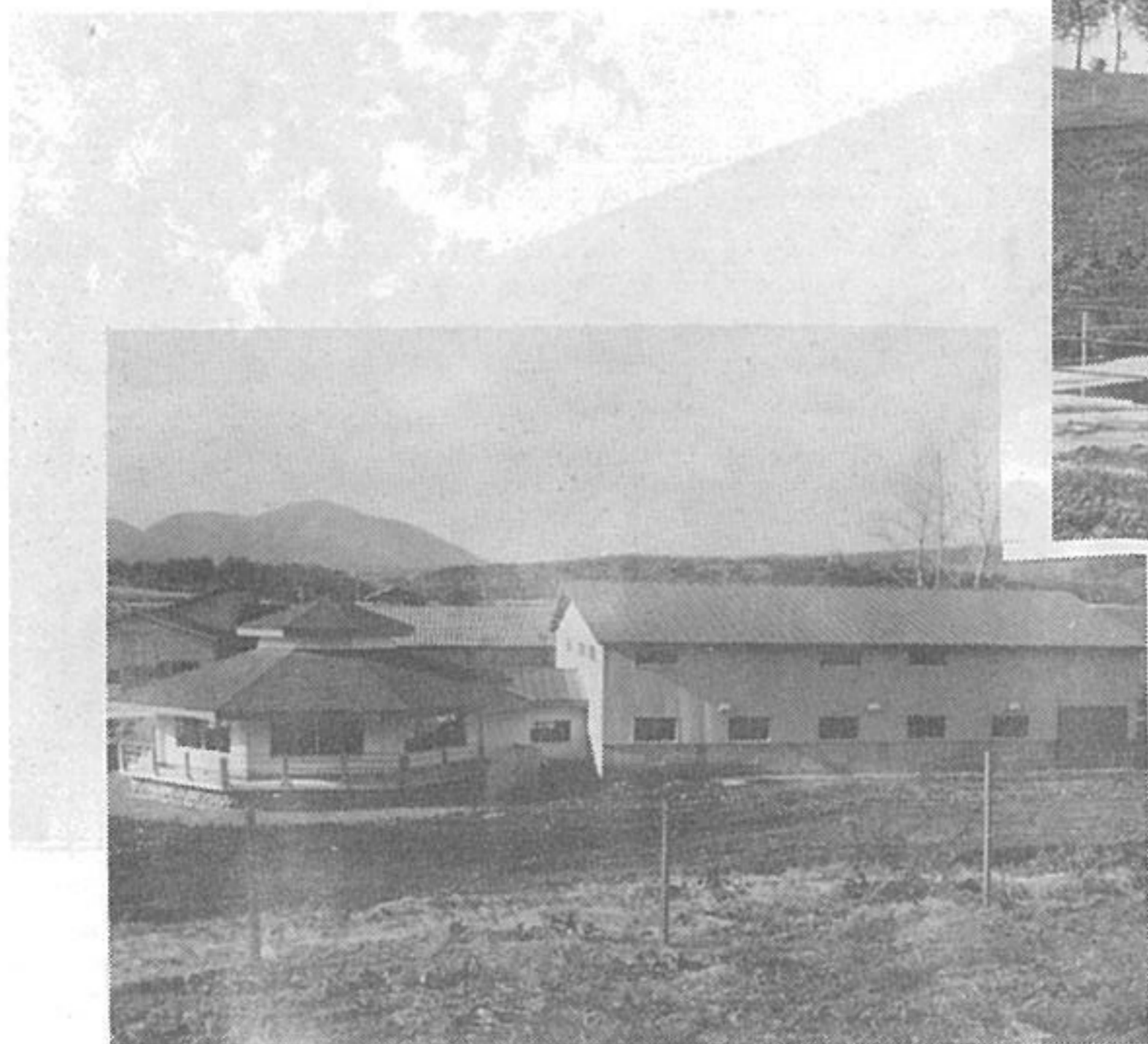
第です。



体 育 館



スラリーストア



ロータリーパーラ (12ポイント)

卒業生からの便り

酪大に思う

第四期生 筒井彦二

一月末、日笠部長より学園便り掲載の原稿を申し渡された時、返事はしたものの地元卒業生として、何か恥ずかしいものを感じない訳にはいかなかった。それは我々四期生が卒業して以来母校の進展ぶりは大変なものである。技術的な面、そして乳牛の能力等々、それなのに私は、中四国に散らばる学友に、何ひとつ報告してないのであり、たまたま出会った人に話す程度でした。

五年前、永井副校長就任以来、第一牧場牛舎の流下式工事に始まり、五一年度は学生研修センター、女子寮、一見ドライブインを思わす第二牧場事務所、そして、私のようなバレーボール狂を「アッ」と言わせた体育館、それぞれ、様式、色彩ともに、蒜山の自然に合ったユニークなものであり、出来上がったばかりのロータリーパーラは、私共のような弱少酪農家には、正直なところ想像

には驚くばかりであった。今思い出しても、あの田舎町のジャージー大会まで県知事がよく来たものだと、くだらん考えを持ち続けて揺れる飛行機で帰ったものです。酪農の合い

間にも楽農を求め、酪青研事業の削蹄、狩猟、バレーボールに精を出し

ております。特にバレーボールでは、蒜山地区の大会には必らず「酪農大

学校チーム」が参加してくれるのが嬉しく、常にメンバーが変るこのチ

ームは、地元二〇チームにも人気があり、我々の頃とは大違いに地元と

の交流が生れて行く現状です。ただ参加してくれるチームに、今年は何

期生ですか」と、たづねるたびに、自分も年だけは確実に上昇している

ことを痛感する次第です。それもそのはず、私も既に二児の父親、飼料

代が少し下がって牛乳一キロ当り三円ぐらゐの値上げに匹敵すると聞き、

今やノ、と思うも、気ばかりで一向に乳量は増えない。

これからは、学校の様子ぐらゐは学友諸氏に報告せねばと、決意!!

ペンを置くことにします。

ヨーロッパ見たまま

第四期生 遠藤祐史

私は今回山地酪農研究会の推選で全国酪農協会主催の第12回欧州酪農して派遣され、昭和五二年八月二十

六日より九月十四日までの二〇日間ヨーロッパ六ヶ国を訪問してきました。

(百九名参加)訪問国はデンマーク、イギリス、フランス、西ドイ

ツ、オランダ、スイスです。うすれかけた記憶をたよりに訪問した順序

で報告してみます。八月二十六日夜、羽田を出発、十六時間後にデンマー

クのコペンハーゲンに到着、待っていた三台のバスに分乗して市内観光、

アンデルセンでおなじみの人魚の像、衛兵の交替の見えるアマリエンボ

ルグ城、歩行者天国になっているストロイェット通りで始めて買い物

をしました。この一回の買物で言葉の心配もどこへやら、奴胸がつかまし

て古い物が多く、いたる所に彫刻が

ほどこざれていきます。人は大きく、

ジーパン姿が非常に多く、女性はノ

ーブラが多いですよ。夜近くのチボ

リ公園に出かけ、子供から老人まで

が北欧の短い夏を精一杯楽しもうと

陽気にさわいでいました。私達も人

ごみをかきわけて(けっしてオーバ

ーでない)歩きまわりました。

デンマーク農業の概況は総面積は

日本の九州よりやや大きく大小五〇

〇の島々から成っています。国土の

七〇%が農耕地と放牧地です。デン

マーク酪農の特徴は草地が少なく農

耕地が多い(農耕地六二%、牧草地

六・七%)したがって飼料作物型酪

農といえるようです。この国の一戸

当り乳牛の平均飼養頭数は二〇頭、

所有面積二〇ha位です。そして豚が

人口より多い。私達は二戸の酪農家

に行ったのですが、やはり酪農経営

に養豚を加えた複合経営でした。な

ぜかと聞くと、豚肉の需要が多く、

一人でも多頭数飼える。又だぶつい

ている安いスキムミルクを与えるこ

とができるからということ。

西ドイツ農業の概要、面積は日本の%、人口は%、食糧自給率は約七〇%、農業生産額に占める家畜生産額は七五%に近い。酪農の規模としては地方によって非常に差があるが、平均頭数九頭、平均土地所有面積は一五〜二〇haです。出発前から西ドイツで一番期待していたのが、マシーネンリング(農業機械銀行)の組織についてです。これは今から二十年前、ガイヤース・ベルが博士の構

想により、最初十四戸の農家が集まって始めたものです。マシーネンリングは組織として機械を所有しているのではなく、個々の農家が所有している機械で賃作業をするのを仲介する組織であり、専任のオペレーターを組織として雇用することもないし組織として新しい機械投資をすることもないのです。リングを通じて組織的に賃作業を仲介されることによって自己経営だけでは過剰な能力の機械をもつ農民は、その機械を能力一杯に使えるようになる。私達の回りにも非常に効率の悪い機械利用をしている人が少なくありません。こうしたことをもっともと考える必要があるのではないのでしょうか。

より高い運河そして、はね橋、数は少なくはなっている風車、なんと言ってもオランダは国土が狭く(九州より小さい)人口密度は世界一である。そんな中で何百年も前から干拓事業が進められて来たのです。この干拓事業は国土を広げるだけでなく水害から国土を守るという防災の意味が大である。酪農では、既存農家の飼養規模は小さいが干拓地の入植者の規模は大きく土地五十haに対して乳牛一〇〇頭位です。ヨーロッパの中でもきわめて集約的な酪農であるが、最近の急速な経済成長と乳価据え置で経営が苦しく多頭化がますます進んでいるようです。

スイスの農業の概況・総面積は日本の九州とほぼ同じ、人口六三〇万人、言葉は独語・仏語・伊語の三ヶ国語が主体、農業は海拔一九三メートルから四、六三四メートルまでの間でなわわれている。スイスの農業粗収入のうち畜産収入が七五%である。酪農規模は平均頭数は十頭余り、土地所有面積十ha、全体的に規模は小さいようです。このすばらしいイスの景色とその中にとけこんだ農業を守るために政府は相当の援助をしています。スイスはヘルパー制度

休暇を取るためのヘルパーは認められていなくて兵隊義務のために必要であったのでしょうか。しかし所得によって利用料金が違い、あまり安くはないために利用者は少ないようです。しかし、何と言ってもスイスの景色は最高ですね。

イギリスは日本の約%の面積でこの八十%が農用地で、この農用地の六十%は牧草地です。酪農家の一戸当りの面積は四五ha、乳牛が四十頭とヨーロッパでもとび抜けて大きい。農業人口は全労働人口の二・七%であるが、農業雇用労働者その三倍位いるそうです。酪農については、ミルク・マーケットティングボードという高度に発達した集乳組織が完備しています。牛乳生産費は非常に安く生乳ECの中でもイギリスの農産物価格が大きな問題となっているそうです。どの国も農産物価格の安定確保には大きな努力を払っているようです。

こうしてヨーロッパを見てまわり感じたことは、自給飼料を中心とした堅実な経営であり、これが酪農の原点であると確信しました。物が日本ほど氾濫してなく生活は質素であるが、精神的に進んでいると感じる。高福祉・高負担といわれるように税金が高い(所得の三十〜四十%)のと、どの国の人も言っていました。日本人が貯金や保険をかけるのとどちらが良いだろうか。

金が高い(所得の三十〜四十%)のと、どの国の人も言っていました。日本人が貯金や保険をかけるのとどちらが良いだろうか。

金が高い(所得の三十〜四十%)のと、どの国の人も言っていました。日本人が貯金や保険をかけるのとどちらが良いだろうか。

金が高い(所得の三十〜四十%)のと、どの国の人も言っていました。日本人が貯金や保険をかけるのとどちらが良いだろうか。

金が高い(所得の三十〜四十%)のと、どの国の人も言っていました。日本人が貯金や保険をかけるのとどちらが良いだろうか。

金が高い(所得の三十〜四十%)のと、どの国の人も言っていました。日本人が貯金や保険をかけるのとどちらが良いだろうか。

金が高い(所得の三十〜四十%)のと、どの国の人も言っていました。日本人が貯金や保険をかけるのとどちらが良いだろうか。

金が高い(所得の三十〜四十%)のと、どの国の人も言っていました。日本人が貯金や保険をかけるのとどちらが良いだろうか。

金が高い(所得の三十〜四十%)のと、どの国の人も言っていました。日本人が貯金や保険をかけるのとどちらが良いだろうか。

ヨーロッパへ見たまも



金が高い(所得の三十〜四十%)のと、どの国の人も言っていました。日本人が貯金や保険をかけるのとどちらが良いだろうか。

私の経営概況

第六期生 長 綱 義 則

私がこの酪農経営の道に入ったのは、昭和四十七年春、当大学を卒業すると同時に、父より三頭の成牛と一頭の育成牛を譲り受け、収支すべてをまかされたのが酪農部門の開始といえるでしょう。

いざやりかけてみると、ただ四頭の飼養管理すら十分に行かず、起立不能、粗飼料生産減等、多くの問題

にぶつかる毎日で、そのたびに当大に学校に相談方遊びによく行ったものでした。そうしたなかで酪農経営の難しさを感じました。少頭数ながらそうしたいろいろな事を体験した上で、昭和四八年、三〇頭の経営を開始しました。私が酪農部門、両親が、水田、大根及び、えの木茸協業部門で、お互い独立採算制とし、労働力の交換等を行ない、各部門において高利潤を追求する、独立採算型協同複合経営で経営拡大を図った。

開始以来、満五年となり頭数及び乳量もぼく計画通りに進むにつれて、酪農経営の楽しさを見出した今日、五〇年より開始された個体乳量検定

土地基盤 (S 52年)

水田	300
普通畑	60
山林	300
牧草地	350
水田借地	100
モロコシ 飼料用草	100

家族構成

父	55	1.0
母	55	0.8
本人	25	1.0
妻	25	0.8
長男	0	
次男	0	

への自信と確信を得る事が出来、乳牛個体のバラつきを感じて個体改良の重要性を痛感するこの頃です。この基礎データを元に今年より乳牛個体の改良に取り組んでいます。

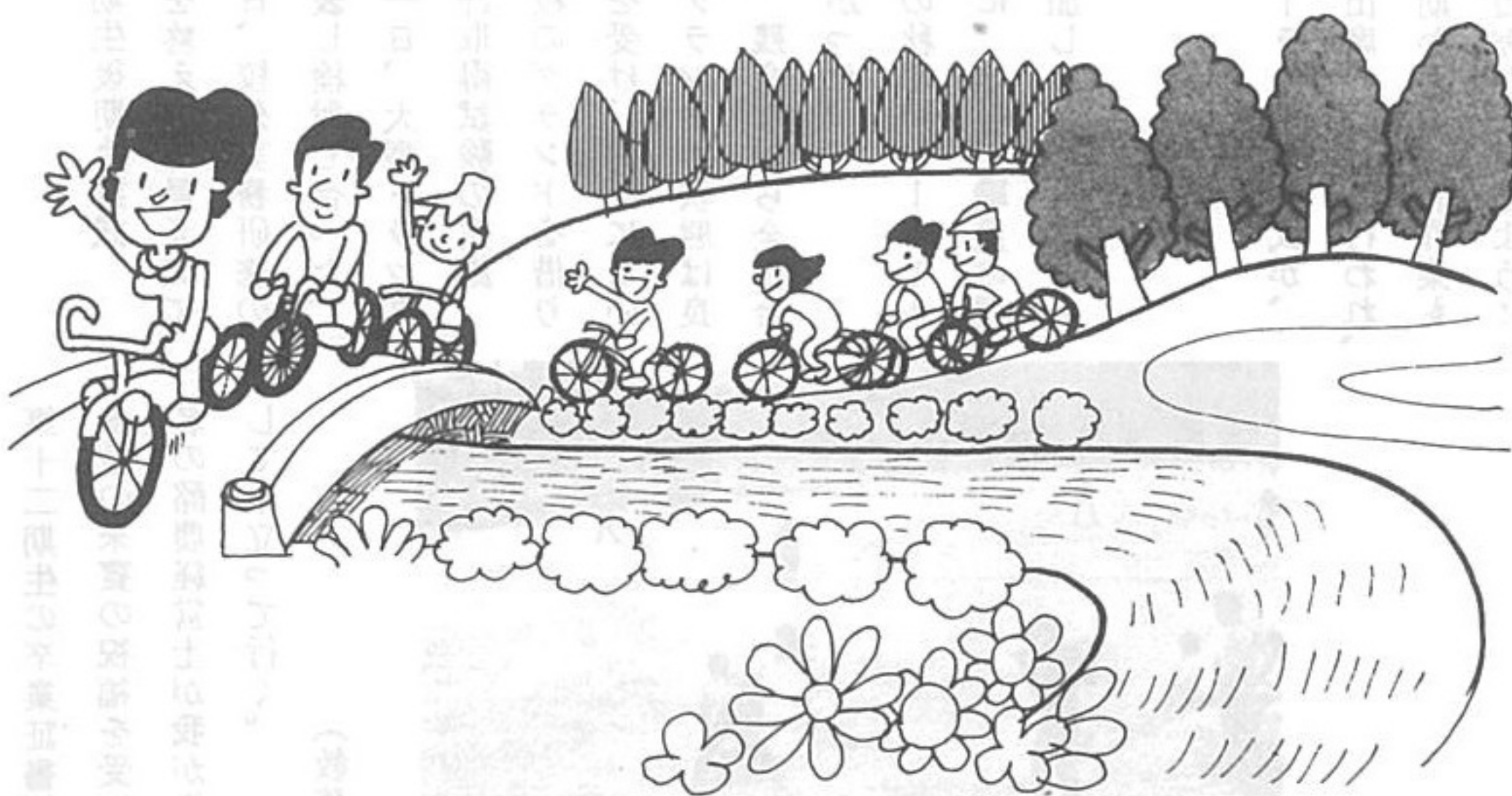
高所得の酪農経営の一点として、良質粗飼料の生産にも大きなウエイトを置かなくてはならないと思ひ、昭和五〇年放牧地全域に糞尿散布出来るよう定置配管を行ない、粗飼料の生産性を図ると共に、牛乳及び粗飼料の労働削減、糞尿の処理、合理化を図っています。また放牧地の高

利用とロス率低下の為二〇cm前後の放牧を励行し、最高乳量持続にも心がけ、徹底した乳量追求も忘れてはなりません。このように地域に即した酪農体系確立の為に、まず乳牛の特徴を原点から見つめ、地域環境に適合した管理形態を実践化して行かなくては、他産業への対抗が困難になると思ひ、酪農の原点を見つめ問題点の把握と経営の改善に取り組んで行かなくてはならないと思ひます。

効率的労働力で、いかに多くの生産を上げるかについては、とくに本格的に取り組んで以来大きな課題でした。まず四八年、三〇頭繫対頭式自然流下式牛舎を建設し畜舎衛生、定置配管による糞尿処理及び利用、飼料給与管理時間の省力化を図る事が出来ました。また、パイプラインミルカー自動洗浄機等の設置により乳質改善はもとより、搾乳及び牛乳処理の飛躍的な省力化が達成されました。以上、自給飼料増産確保、個体乳量の増加及び省力化が実現でき、経営収支上でもまずまずの数値が出てまいりました。

今後、生産性の高い酪農、より豊かな生活をめざすにしても、周囲の環境が酪農と調和しなくなり、経営

拡大等前途困難な課題が少なくありませんが私を取りまく地域社会の相互理解と協調において、山地酪農が果たす役割、即ち一般消費者に対する酪農の重要性、自然保護等の面からも健全でかつ合理性に富んだ酪農、明るい農村建設のため、大地にしっかり足をつけ、たゆまぬ努力を重ねて行かなくてはならないと思ひます。



酪農経営の楽しさを見出した今日、五〇年より開始された個体乳量検定

大学校日誌

四月

○五日、第十三期生の入学式
 入学生は二十七名（うち女子四名）
 で将来の酪農経営に志し、胸をふ
 くらませ酪農大学生として第一歩
 をふみだした。

○第二牧場では、十八日から放牧が
 開始されジャージ君も長い冬ごも
 りからようやく開放され、春の陽
 ざしを背に受けて自然に返ったひ
 ときを、牧草で満腹していた。第
 一牧場では、常守先生の圃場管理
 の徹底で昨年はサイレージが豊富



落成記念

に貯蔵でき、四月にも十分に給与
 ができたので放牧は例年より、若
 干遅い二十二日から開始した。

五月

○教育施設落成式の挙句

昭和四十八年度に、当時の諸先生
 方の昼夜を徹して努力された、教
 育施設整備計画に基づいて、四十
 九年度より各年度に建設整備がな
 された諸施設の事業がほぼ完成し
 たので、これを記念し多数の来賓、
 関係者の出席の中で盛大に落成式
 が行われました。

七月

○乳牛動態調査の実施

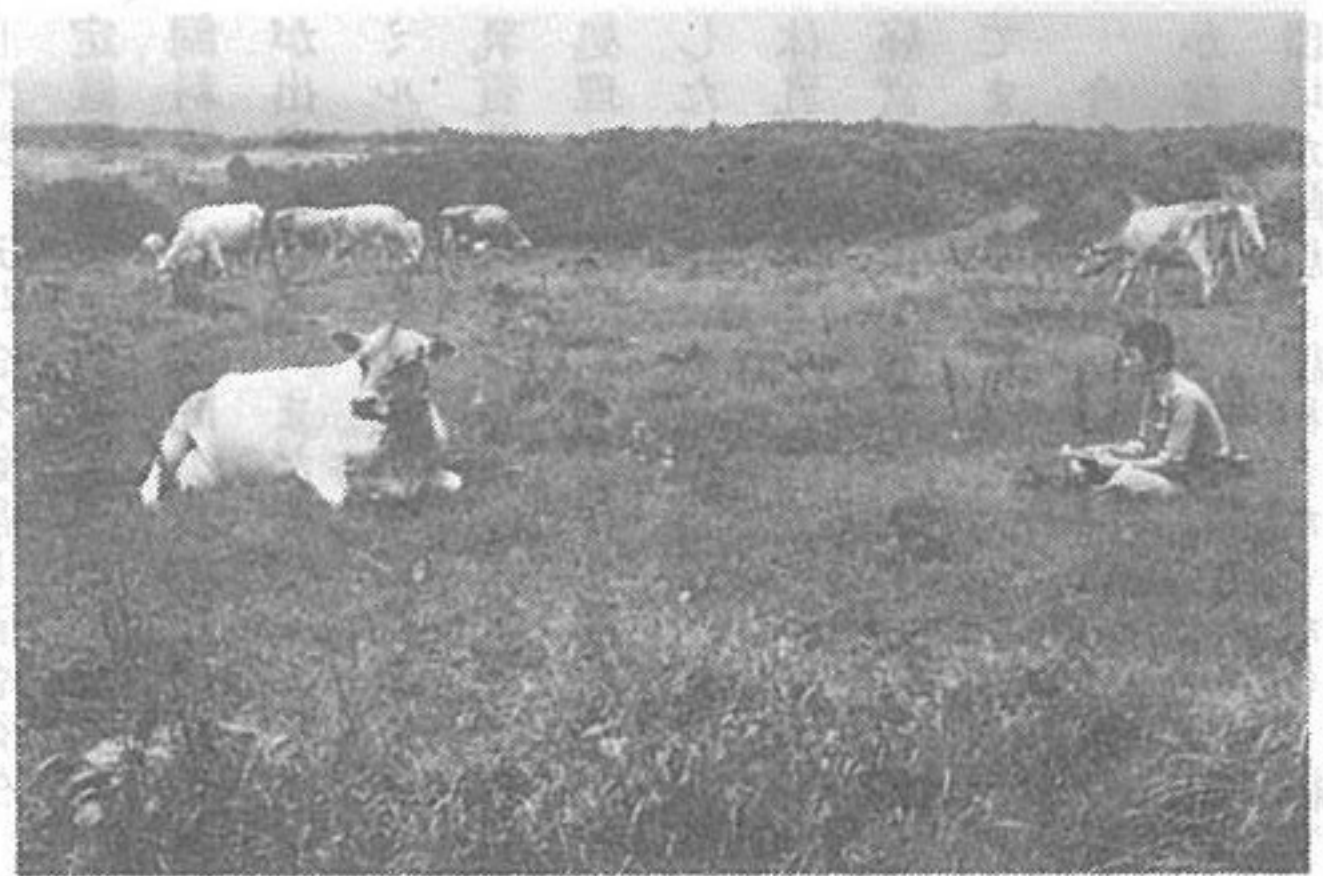
例年より早く、十四、十五日の両
 日にわたりジャージ、ホルスタイ
 ンについて二十四時間の生息を調
 査したが途中、豪雨にみまわれ、
 牛君も「モー牛舎に入れてノ」と
 体を寄せ合う一幕も見られた。

八月

○ロータリーパーラ施設建設に着手

一連の施設整備計画に基づいて、
 本年も地方競馬全国協会および岡
 山県の強力なご援助により、十月
 完成を目途に着手した。

○とうもろこしサイレージ詰込み作
 業開始
 本年度は、播種後晴天が続いたた



め発芽がやや遅れたが、その後の
 生育は学生諸氏の除草の徹底で順
 調に進んだ。第一牧場では、生育
 最中に強風を伴う雷雨にみまわれ
 一部倒伏したため、刈取作業は職
 員と学生の人海作戦による連日実
 習で無事終了した。

九月

○二十六日、第十三期生と第十二期

生校内研修生、職員でソフトボー
 ル大会を実施したが、戦果は残念
 ながら敬老を含む職員チームの優
 勝となった。

○二十八日、第十三期生前期終業式
 前期の教課を終えて、校外実務研
 修地に向って元気に出発した。

十月

○四日、第十二期生後期始業式

校外実務研修を終えて全員元気に
 帰校した。五日、校外実務研修の
 成果を互に発表し検討し合った。

○二十日、二十一日、大型トラック

ターの運転免許取得試験の実施、
 本年も蒜山高校のグラウンドを借り
 て、実地試験を受け、例年にな
 い好天気に恵れグラウンドの状態は良
 好であったが、残念ながら全員合
 格には至らなかった。

○蒜山体協主催の秋季バレーボール

リーグ戦大会に、学生、職員の混
 合チームで参加したが、惜しくも
 入賞ならず。

○十二月八日

ロータリーパーラの試運転式が、
 関係者多数の出席のもとに行われ、
 第二牧場の早期からの搾乳作業も
 かなりの時間短縮ができるよう
 なった。

○一月二十五日～二月四日

家畜人工授精講習会の開催
 岡山県の主催による家畜人工授精
 講習会が開催され、受講者は三十
 四名で、二月十三、十四日に講習
 会修業試験が行われ全員の合格を
 願っている。

○三月二十八日

第十二期生の卒業証書授与式
 多数の来賓の祝福を受け、三十二
 名の酪農経営士が我が学舎を後に
 して巣立って行く。
 (教務課 記)



ソフトボール大会



お知らせ

四名が華燭の宴を挙げられ新家庭を築かれた。今後のご活躍とご多幸を祝します。

◎卒業生死亡のお知らせ

島根県の本校卒業生も、第十二期和五十二年七月二十六日急逝されました。一家の大黒柱を失われた生を加えると三五名に達し、五十二年九月十日に卒業生十五名が島根県大田市に参集され、「卒業生会」が盛大に開催されました。学校からは、永井副校長が出席されて熱の入った意見交換がされ、会長(第二期生)土江和男、事務局(第四期生)住田益三君で発足、今後のお互の連けいを深め意義ある会に意欲を燃しておられます。

○第八期生の同窓会が、五十三年一月十四日本校近くの大前旅館で行われ、同期生十九名が参集、また学校からは永井副校長、常守先生山口先生も出席され、今昔一夜を語り明かす盛大さであった。

○第四期生筒井彦二君と長綱義則君の両名は、九月一日、二日秋田県百利郡矢島町で開催された「全国ジャージ大会」に出席、優良事例の研究発表をされた。

○昭和五十二年において、第十期生吉原謙一君、築山宗慈君、第一期生井上雅風君と小寺彰子嬢の

四名が華燭の宴を挙げられ新家庭を築かれた。今後のご活躍とご多幸を祝します。

◎卒業生死亡のお知らせ

島根県の本校卒業生も、第十二期和五十二年七月二十六日急逝されました。一家の大黒柱を失われた生を加えると三五名に達し、五十二年九月十日に卒業生十五名が島根県大田市に参集され、「卒業生会」が盛大に開催されました。学校からは、永井副校長が出席されて熱の入った意見交換がされ、会長(第二期生)土江和男、事務局(第四期生)住田益三君で発足、今後のお互の連けいを深め意義ある会に意欲を燃しておられます。

○第八期生の同窓会が、五十三年一月十四日本校近くの大前旅館で行われ、同期生十九名が参集、また学校からは永井副校長、常守先生山口先生も出席され、今昔一夜を語り明かす盛大さであった。

○第四期生筒井彦二君と長綱義則君の両名は、九月一日、二日秋田県百利郡矢島町で開催された「全国ジャージ大会」に出席、優良事例の研究発表をされた。

○昭和五十二年において、第十期生吉原謙一君、築山宗慈君、第一期生井上雅風君と小寺彰子嬢の

四名が華燭の宴を挙げられ新家庭を築かれた。今後のご活躍とご多幸を祝します。

◎卒業生死亡のお知らせ

島根県の本校卒業生も、第十二期和五十二年七月二十六日急逝されました。一家の大黒柱を失われた生を加えると三五名に達し、五十二年九月十日に卒業生十五名が島根県大田市に参集され、「卒業生会」が盛大に開催されました。学校からは、永井副校長が出席されて熱の入った意見交換がされ、会長(第二期生)土江和男、事務局(第四期生)住田益三君で発足、今後のお互の連けいを深め意義ある会に意欲を燃しておられます。

○第八期生の同窓会が、五十三年一月十四日本校近くの大前旅館で行われ、同期生十九名が参集、また学校からは永井副校長、常守先生山口先生も出席され、今昔一夜を語り明かす盛大さであった。

○第四期生筒井彦二君と長綱義則君の両名は、九月一日、二日秋田県百利郡矢島町で開催された「全国ジャージ大会」に出席、優良事例の研究発表をされた。

○昭和五十二年において、第十期生吉原謙一君、築山宗慈君、第一期生井上雅風君と小寺彰子嬢の

四名が華燭の宴を挙げられ新家庭を築かれた。今後のご活躍とご多幸を祝します。

◎卒業生死亡のお知らせ

島根県の本校卒業生も、第十二期和五十二年七月二十六日急逝されました。一家の大黒柱を失われた生を加えると三五名に達し、五十二年九月十日に卒業生十五名が島根県大田市に参集され、「卒業生会」が盛大に開催されました。学校からは、永井副校長が出席されて熱の入った意見交換がされ、会長(第二期生)土江和男、事務局(第四期生)住田益三君で発足、今後のお互の連けいを深め意義ある会に意欲を燃しておられます。

○第八期生の同窓会が、五十三年一月十四日本校近くの大前旅館で行われ、同期生十九名が参集、また学校からは永井副校長、常守先生山口先生も出席され、今昔一夜を語り明かす盛大さであった。

○第四期生筒井彦二君と長綱義則君の両名は、九月一日、二日秋田県百利郡矢島町で開催された「全国ジャージ大会」に出席、優良事例の研究発表をされた。

○昭和五十二年において、第十期生吉原謙一君、築山宗慈君、第一期生井上雅風君と小寺彰子嬢の

四名が華燭の宴を挙げられ新家庭を築かれた。今後のご活躍とご多幸を祝します。

◎卒業生死亡のお知らせ

島根県の本校卒業生も、第十二期和五十二年七月二十六日急逝されました。一家の大黒柱を失われた生を加えると三五名に達し、五十二年九月十日に卒業生十五名が島根県大田市に参集され、「卒業生会」が盛大に開催されました。学校からは、永井副校長が出席されて熱の入った意見交換がされ、会長(第二期生)土江和男、事務局(第四期生)住田益三君で発足、今後のお互の連けいを深め意義ある会に意欲を燃しておられます。

○第八期生の同窓会が、五十三年一月十四日本校近くの大前旅館で行われ、同期生十九名が参集、また学校からは永井副校長、常守先生山口先生も出席され、今昔一夜を語り明かす盛大さであった。

○第四期生筒井彦二君と長綱義則君の両名は、九月一日、二日秋田県百利郡矢島町で開催された「全国ジャージ大会」に出席、優良事例の研究発表をされた。

○昭和五十二年において、第十期生吉原謙一君、築山宗慈君、第一期生井上雅風君と小寺彰子嬢の

(第二牧場長) 赤木三夫

岡山県農林部畜産課

(教務課長) 新田正

岡山県高梁地方振興局農林事業

部農業振興課畜産係長

(総務部主事) 大田清志

岡山県海区漁業調整委員会事務

局

(第二牧場技師) 居森一憲

津山家畜保健衛生所

(第二牧場助手) 金森孝史

岡山県養鶏試験場

現職員名簿

(昭和五十二年四月一日現在)

校長 信江茂

副校長 永井仁

次長 竹内秀雄

(総務部)

部長 野島真純

主事 長尾敏彦

堀義和

津田清子

山口鍊二

戸田道子

神田智恵子

”(教育部)

部長 日笠重雄

第一牧場長 光畑稔

技師 柴田範彦

主任助手 常守実

第二牧場長 百野勇

技師 森次興士

” 大内紀章

助手 三牧孝徳

” 磯田博

” 高橋俊彦

教務課長 津高馨

技師 早瀬文繁

編集後記

卒業生の皆さん、お元気で活躍のことと思います。

今回の学園だよりは、永井副校長の着任以来当大学の教育効果の向上のため、教育施設の整備拡充に手腕をふるわれ、職員一丸となつて取り組まれた整備の内容を、写真と記事により紹介しました。

永井副校長は、昭和四十八年四月に着任されて以来、五カ年間にわたり本校の基盤整備、諸施設整備、乳牛改良にと、献身の努力をされ、今日の酪農大学校を築つてくれましたが、五十三年三月末をもって退職されます。

恒久的な教育施設を残していただき、卒業生の皆さんと共に、感謝し、大切にし、大いに活用して行きたいと思っております。

今後、卒業生の皆さんと学園の発展のため連けいをますます深めて行きたいと思っておりますので、皆様からのお便り、ご寄稿を期待しております。

